向井潤吉の絵画とエッセー展

会津のお殿さまが江戸への参覲交代のために
選んだ道筋だと聞いた。
村の道としてはあまりに広いのに驚いたが、
これは中央に大きな溝川があったためである。
郡山、また須賀川から猪苗代線にぬける途中にある。

御代宿初秋［福島県郡山市湖南町三代］一九六五年

2003年
4月5日(土)→7月27日(日)

開館時間＝午前10時～午後6時（入館は5時30分まで）
休館日＝毎週月曜日（ただし祝日と重なった場合は翌日）
観覧料＝一般200円（160円）
大高生150円（120円）
中小生100円（80円）
65歳以上及び障害者の方100円（80円）
（）内は20名以上の団体料金土・日・休日は小・中学生は無料

世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581

向井潤吉の
絵画とエッセー展

戦後から50有余年が過ぎ去った今、日本はさまざまな面で、大きな変貌を遂げてきました。それは衣食住という人間生活の根源に触れる、大きな変化であり、私たちは、多くのものを得つつも、多くのものも失ってきました。

向井先生が草屋根の民家を題材とする作品を描き始められたのは、戦後間もない頃のことでした。そして約40年間にわたって、先生は全国各地に取材を重ね、厖大な作品を制作されてきました。

先生が描き遺された草屋根の民家を題材とした諸作品は、日本の伝統的な住まいの形状を写しているということにおわらず、日本人の生活そのものを、草屋根の民家という題材を通じて表現していると言えるのではないでしょうか。今日においては、向井先生が描かれた草屋根の民家を題材とした作品は、美術作品という範疇を越えて、とても重要で、かけがえのない記録としての意味をもち始めています。草屋根の民家に具体的にかかわりのある人々が少数になってきた今、生活の拠点となっていた伝統的な住まいの有様の一端を、私たちは向井先生の作品を通じて知ることになります。

ところで向井潤吉先生は、制作の旅先で得た心象や、そこで出会った風景や人を綴る、エッセイストでもありました。そこには、彼の絵画作品から立ちのぼる独特な臨場感と共通する、こまやな観察眼を感じとることができます。また、簡潔なそれぞれの短文には、向井潤吉先生のユーモアとウィットに富んだ精神と人柄がそこはかとなく漂っています。

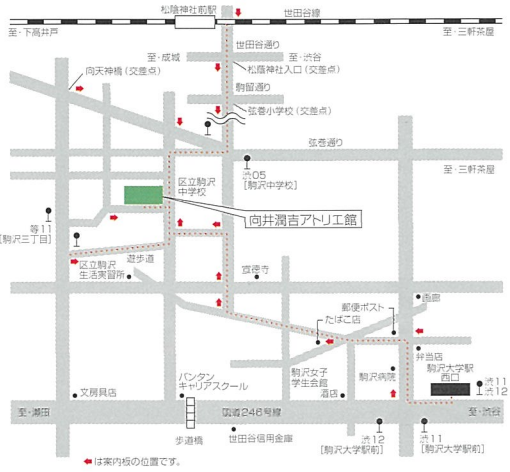
向井先生にとっては心覚えのような一文一文を、作品と照らし合わせて読み返すことによって、私たちはよりいっそう、絵画作品への理解を深めることになるでしょう。またそこには、向井潤吉先生の生前の心象を味わいながら、描かれた風景に思いをいたらせる楽しみもあるかと思います。
このたびの展覧会では、展示作品にゆかりあるエッセーを添え、絵画のみならず、向井先生の旅先で得た心象をお楽しみいただきたいと思います。

世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581

●最寄り交通機関のご案内

東急田園都市線［駒沢大学］駅　西口　下車／徒歩10分
東急世田谷線［松陰神社前］駅　下車／徒歩17分
東急バス（渋05）渋谷〜弦巻営業所　［駒沢中学校］　停留所下車／徒歩３分
東急バス（等11）祖師谷折返所〜等々力［駒沢三丁目］　停留所下車／徒歩３分
東急バス（渋11）渋谷〜田園調布　［駒沢大学駅前］停留所下車／徒歩10分
東急バス（渋12）渋谷〜二子玉川　［駒沢大学駅前］停留所下車／徒歩10分



広重にたしか「六十余州名所図絵」という珍しい縦型の版画があり、その中の一枚に榛名湖と榛名神社を一図に収めた構図があった。私はそれを確かめにここを訪れたが、数百メートルもあるエレベーターでも上下して利用しない限り、決して小さい紙片に描き写せるものではない。私は承知しながらマンマと騙された思いで、しかし快い笑いを湛えながら下山のバスを待った。

榛名にて［群馬県群馬郡榛名町］1962年

北信 麻績の町［長野県東筑摩郡麻績村］制作年代不詳

松代地震のあった頃、その震源地という冠着山トンネルをこわごわ通り抜けて麻績に下車した。この町中に分厚い屋根を持つ民家があるのを写真で知って訪ねたのだが、すでに造りが改変され美容院の飾り窓になっていたのでガッカリした。近くに芭蕉が「身にしみて大根からし秋の風」とうたった名句を刻んだ小さい碑が立っていた。私はそれを見ただけで満足した。

晩夏［栃木県］1963年頃

鶴の来る村［山口県］1967年

沢内村六月［岩手県和賀郡沢内村］1988年

山峡立春［神奈川県足柄上郡山北町世附］1975年頃